

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 御園生涼子

御園生涼子氏の博士号学位請求論文『越境する情動——一九三〇年代松竹メロドラマ映画と近代における文化の流動性』は、一九三〇年代の日本映画とりわけ松竹キネマ合弁会社において製作されたメロドラマ映画を取り上げ、その映像テキスト及び政治的・社会的背景の分析を通じて、日本における「近代性」の特質を、国境横断的な文化や資本の移動と、それに伴う民族間・国家間の葛藤と折衝という視点から明らかにすることを試みた研究である。

本論文は全四章の構成をとっている。まず第一章においては、ハリウッド犯罪メロドラマ映画の典型的様式が文化翻訳された一例として小津安二郎監督『その夜の妻』（一九三〇年）と『非常線の女』（一九三三年）を題材に採りつつ、文化的・階級的・人種的な他者への恐怖と、社会の流動性・混血性を加速させる都市空間に対する不安や憧憬が、この時期の日本映画にどのように移植され、文化間の越境現象を多様化させていったかが分析されている。第二章では、「墮落した女のメロドラマ *fallen woman melodrama*」としてカテゴライズされる清水宏監督『港の日本娘』（一九三三年）及び『恋も忘れて』（一九三七年）において、「女性性」の表象がいかに関「国民国家」の枠組みにおいて形成され、またそこからの逸脱を断罪されていたかが、映画検閲の問題を手掛かりに考察され、「墮落した女」の表象が「異種混濁性」や「他者性」のイメージへと結晶してゆくさまが緻密に分析されている。

さらに第三章において、横光利一原作・島津保次郎監督の『家族会議』（一九三六年）を取り上げ、金融と恋愛を主題とするこの家族メロドラマを取り巻く小説・新聞・映画・雑誌といったマス・メディアのネットワークが分析され、一見「国民＝民族」の内部に自閉しているかに見えるこの作品が、実は近代のグローバルな文化的流動性によって産み出された「領土的論理」と「資本主義的論理」との相克を象徴的に描き出しているさまが透視される。最終章の第四章においては、アジア太平洋戦争の開戦直前の時期に空前のヒット作となった野村宏将監督の『愛染かつら』三部作（一九三八―三九年）を題材として、松竹女性メロドラマの集大成と言ってよいこの作品を契機として、映画観客＝資本主義経済の消費者としての「大衆」が、「国民国家」の成員である「国民」として再定義され、いわゆる「超国家主義」ファシズムへと接合されてゆく過程が解明されている。

「越境性」という参照枠をメロドラマ映画研究に導入することによって本論文が達成したものは、東アジアの近代史とフィルム・スタディーズという二つの研究領域を交差させることによって、「近代」のグローバルな地平とそこで発生する文化の流動性のありかたを浮かび上がらせるという課題である。それは一方では、日本映画というローカルな文化

実践が二〇世紀の国境横断的な文化や資本の流れと結びついてゆく過程を示すことで、両大戦間期の日本における「近代性」の特質を問い直す作業を意味している。またそれは他方では、メロドラマ映画という形式を複数の文化・国家間の境界線によって多様化され錯綜化された可変的な場として定義し直すことによって、ハリウッド映画を普遍的モデルとして構築されてきた従来のメロドラマ研究の政治性を検証し、新たな視点から光を当てるという試みでもある。

一九三〇年代日本におけるメロドラマ映画の代表作の映像テキストと、それを取り巻く製作・流通・消費の諸環境の実態とを緻密に分析することを通じて、本論文はこの二重の課題に対して説得力のある応答を行なっている。そこでは、政治的現実とは一見無縁なこうした「通俗的」娯楽作品のうちに胚胎されている隠微なイデオロギー性が明快に剔抉され、国際的な文化伝播の開放性と帝国主義ナショナリズムの自閉性との共犯関係の諸様態が、広い領域にわたる文献渉猟と作品の細部をゆるがせにしない注意深い視線を通じて、鮮やかに解明されている。

審査会においては、取り上げた作品の選択の根拠がやや薄弱なこと、松竹という会社の映画史における位置付けが不十分なこと、分析に当たって使用された概念装置がやや図式的で映画と現実社会の実状を単純化しすぎている弊があることなど、幾つかの批判が提起されたが、それらの瑕瑾は、「メロドラマ映画」というジャンルの歴史的な実像の解明に新たな展開をもたらした本論文の学問的貢献を本質的に損なうものではないという点が最終的に確認された。

従って、本審査委員会は、全員一致で、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。